

【書評】 トランプ政権誕生への選挙戦略を読む鍵：「エイジオブサーベイランスキャピタリズム」 ショシャナ・ズボフ著
2019 年、「アディオスアメリカ」 アン・コールター著 2015 年

尾関歩

2016 年アメリカ大統領選はヒラリー圧勝確実と連日報道され続けたにもかかわらず開票間もなくあっさりトランプ当確となり前代未聞の歴史的な大逆転劇とおよそ位置付けられた。確かにヒラリーは総得票数では優位に立ったもののそれはごく一部の過密大都会票に依存するもので市町村レベルでの戦況を広大なアメリカ全体の地図に投影すれば逆に疑いなき圧倒的なトランプ旋風が露出される。つまりグラウンドゼロレベルではトランプ圧勝の地盤が存在しその事実が全く報道されていなかったことが明白である。報道されない事実として一体何が起こっていたのか、そしてトランプ選挙対策部は超政治ベテランヒラリー陣営にいかなる対抗策を構築したのであろうか。

トランプ陣営は不利な既存報道不透明さを熟知し打開策をキャンペーン神髄としたと推測される。そしてその戦法も候補者対国民の関係上斬新な情報伝達双方向性を骨格とした。具体的には既存の政治家が無視またメディアも扱わないが最も国民が欲する政策を曝け出し真の民意に耳を傾ける姿勢を前面に出し稀にみる熱狂的な支持層を確保した点。そしてその逆方向の情報伝達、大統領候補としての生の声をリアルタイムにかつマスメディアのフィルターを限りなく排除した形で有権者に配信した点である。

こうした枠組みを吟味すれば偶然性の低さが浮き彫りされ根本的な現象解説への更なるヒントの探求に導かれよう。そしてそれはアメリカ大統領選挙を直接テーマとしない二つの著書へと行きつく。一つはトランプ戦略の中核マニフェストと化した移民問題を扱った 2015 年アン・コールター著「アディオスアメリカ」、もう一つは選挙後出版ではあるが現代の情報戦による不透明巨大 AI システムを解説しかつ寡占権力による個人情報乱用を警告した 2019 年ショシャナ・ズボフ著「エイジオブサーベイランスキャピタリズム」である。ともにアメリカ自由民主主義崩壊を警告しこの二つの本が有機的にアメリカ社会から投影する現象は実は歴史的な観点では前例を再演したといえる。

かつてグーテンベルグによる印刷技術の確立がカトリック権威の衰退を招いた史実はトランプによる情報寡占権威対峙方針により最新デジタル資本主義社会において反復された形となった。トランプによるフェイクニュース糾弾は現代版のマルティン・ルーターによる 95 ケ条の意見書復刻といえよう。ラテン語からドイツ語に翻訳された聖書が活版印刷により広く民に行き渡り信仰の解釈法という一情報の教会独占統制が破壊された。トランプはまずその莫大な個人資産をもってして利権がらみのワシントン政治呪縛と距離を置くことができる唯一の候補者となりきった。そして表裏なき現場発信され続ける喧きはまさにその寡占団体によって隠蔽され続けた不都合な事実を暴露した形となった。かつては免罪符の腐敗がその例であり現代のアメリカでは違法移民問題がその一つとトランプは事実上位置付けた。

実はトランプこそフェイクニュースともいわれ続けるが少なくとも社会常識を形成するに蔓延するニュースに対する信憑性をことごとく揺るがした点は確固たる事実であり選挙候補人としては前代未聞の戦略である。好都合な情報のみを盲信させ続けたメディアとしては完璧な存亡危機と化した。必ずしもマスメディアを総てフェイクニュースとしたことではなく、大衆にその可能性を認識させ鵜呑みにしない事実検証の重要性を定着させ民の覚醒を指揮した。グーテンベルグはいわば活字自身を独占してきた権威から技術革新により民に拡散する突破口を確立した。トランプはその活字の内容を独占してきた権威から剥奪し大衆に開示する姿勢を確立したと言えよう。情報寡占既存権威にとって統括不可大衆意思は歴史的に常に最も脅かしい存在であり、この民の覚醒こそが歴史的復唱である。

さて二つの著書であるがズボフおよびコールターは各々の分野では名声を轟かせ続ける権威である。専門分野また支持政治理念も異なる二人がそれぞれの長年にわたる研究により導いた結論はともに現在進行形のアメリカ自由民主主義崩壊危機である。ズボフの切り口は AI を駆使し個人情報を監視体制下に置く寡占巨大企業の圧倒的な消費活動、思想さらには思考回路及び人格形成過程までもを支配体制に組み込む新封建社会「ネオフューダリズム」の考察である。コールターはアメリカでの移民政策を主題とし支配層による恒久的低価格労働力供給経路確保が国家の意義および文化を内面から蝕むとしアメリカ建国信念そしてそれはまさに民主主義への反逆として扱っている。

二人の主張の共通点は以下の通りに要約できる。まずは巨大企業の資本主義における加速し続ける利益崇拜経営のもたらす弊害を追求しそれがいかに民意反映の基に成り立つべき経済、国家繁栄と逆行しているかを指摘している点である。それ

を更に助長する好都合な法規制を施行すべき行政及び選挙にまで蜘蛛の巣を張り巡らしている現実も記されている。大衆の役割もそれぞれ言及しており支配層が賛同意見を得るにあたりそのシステム構築におき巧妙な情報操作を駆使し場合によっては民衆の能動的な賛同を征討したとも唱えている。それぞれアメリカでのテロにも言及しており両著を通して AI 管理社会と移民政策の意外な関連性が浮き彫りになる点は実に興味深い。ともに政治経済的主導権を得る手段の駒とすれば異なる二分野の研究の過程での観測及び行きついた結論が一貫性をなすという点は単に因果関係解明上での自然淘汰の結末かもしれない。参考資料はともに膨大であり主張の信頼性を疑いなきレベルに昇格させた労力は特筆すべきであろう。概算でズボフの著書は三割強、コールターに至っては四割が資料ということになる。他の本とは違いレファレンスをも並読しながらの読解が不可欠なほど本文に負けず濃厚である。前代未聞とも言えるほどの膨大な驚愕的事実を見せつけられた暁にはなぜこれらが知られていないことに対し言論自由の先駆者的役割を果たし続けたはずのアメリカにおいて言わば隠され続けられる現状には危惧の念を寄せられないではいられない。モデル自由国家建国精神、伝統の歪み始めの可能性は憶測の域を超えている。では要約された共通点を念頭に著者および著書の紹介をしよう。

ズボフはシカゴ大学で哲学を専攻しハーバード大学で社会心理学博士号を習得しおよそ 30 の若さでハーバードビジネススクールの客員となり後教授として教鞭を取ることとなるまさにインテリである。出版著書は 1988 年初著を含めわずか三冊にとどまるがハーバードビジネススクールを本拠地としケーススタディ等を執筆し続けている。テーマは常に情報化社会の企業経営及び社会の変革である。長年にわたり培われた職人の経験と勘に依存した生産という年功序列的な経営観念、いわば伝統的会社経営体制の遺脱は単に職人の勘たるものをデータ化することにより解決するとしそれを基にビジネスサイクルの時間短縮また利益向上達成は可能と指摘する。積極的な情報経営改革を導入しさらなる利益を欲する経営者とそれに取り残されかねない労働者という構図は早くからズボフの根底にあるテーマとして生き続けている。かつて産業革命により機械生産に凌駕され追い込まれた労働階級は単に少数経営者への富結集上の使い捨て労働力となり社会問題を引き起こしズボフは同様の変革が情報工学により起きているとする。それは単なる情報仲介といったものではなく今や個人データを原材料とし個人行動予測また購買誘致といった高付加価値情報生産循環を加速し、またそれが多岐にわたる商品として作り上げられる有機的融合もネットワークテクノロジー、特に AI をもってして既に現実稼働状況としている。

日本ではネットフリックスにて独占配信中のドキュメンタリー映画「監視資本主義：デジタル社会がもたらす光と影」への出演を基に知名度を昇格させたであろう。監視資本主義とはまさにサーベイランスキャピタリズム直訳でありこの言葉は 2014 年ズボフ著のエッセイにて創作された。多少の意識を含めれば個人情報監視資本主義あるいは個性化監視資本主義としたほうが適訳といえよう。ただこの言葉、ドキュメンタリー及び本著に関する評価はハイテク技術のさらなる革命的新境地に対する畏怖を募ったものが多くみられ、新たなハッキング事件への時事ニュース評論とも言えるべく展開が主である。ズボフが最も恐れている民主主義を根底から覆す不可逆な起爆剤としてその監視資本を闇に隠れてこの 20 年備蓄してきた事実、また合法ながらその資本構築および運営を不可視化したデザインのマラル上の社会責任を探索した論評はおよそみられない。最先端 AI 技術の商業的活用時事としてではなく法規制、またそれによって抑制および助長される企業経営のあり方を構築する必要性を念頭に読解することが不可欠な個人情報資本主義社会革命論である。

この著書にはハーバードビジネススクールの伝統が DNA として組み込まれていることを感じないではいられない点が二つある。淡々と登場する会社及び産業の背景、法及び道徳的にあいまいな状況の中、では経営者はどう決断すべきかといったビジネススクールケーススタディレポート提出を迫られそうな錯覚に陥る。この著書を通して常に読者に問いかける論調は熟慮ながらの能動的な読書体制をもってして完成するものであろう。伝統の薫る二つ目の点は資源、生産、消費、その管理というサイクルを監視資本主義の基に定義した斬新さである。それは同校の最高権威ともいえるマイケルポーター1985 年著、「コンペティティブアドバンテージ」にて提唱されたバリューチェーンをネットワーク情報産業型に進化させたモデルといえるであろう。ポーターの著書にはそのバリューチェーンを運用するにあたる経営学が考察され、ズボフは同様のバリューチェーンサイクルをハイテク寡占企業による計画的、能動的な情報資源運営活動としている。

本著の本文であるがまずは冒頭に「サーベイランスキャピタリズム」の定義がなされている。続いて更なるズボフ特有の斬新なコンセプトを語る造語が続く。アルビントフラーを浮かび上がらせるかのような言葉遣いを感じられるが相違性は未来社会予期ならぬ現在進行形現象の系統的解説である。駆け出しから本著全般にネット検索大手を名指しで取り上げ監視資本主義を生み出したとし多くの場合経営上倫理に疑問符を打つ。僅か過去 20 年間のことと言えるがそのシステム構築の歴

史解説は単にネットビジネスの領域にとどまらない。2001 年以降ブッシュ大統領下テロ対策名義による個人情報監視体制の法制化に同乗しそれは本来の目的とはかけ離れたレベルで単に商業的圧倒的有利さを独占するしたたかな法整備だったと主張する。

「サーベイランスキャピタリズム」の神髄はほぼ無料、また多くの場合能動的な同意を得ることなく収穫した個人情報を基に消費者へのリアルタイムな需要への応答またそれを喚起させる機会を様々な情報徴収端末に逆発信するサイクルの現存、加速化であろう。消費者は多くのネット無料サービスに便宜性は獲得するも資本主義社会における無代価たる特異点にはおよそ疑問すら持たない。ズボフはそれがサーベイランスキャピタリストの意図であり狡猾、意図的な経営戦略とする。さらに衝撃的な事実ネット検索結果は既に微細個人化され検問および政治プロパガンダに悪用されうる点である。

そこで反メディア勢力の先頭を切るトランプ陣営である。著名アーティスト以上の圧倒的な集客力を誇るトランプ政治集会では常にフェイクニュース及びソーシャルメディア操作を糾弾し壮大な喚起を呼ぶ。それはあたかも民衆が能動的理解をせずとも「サーベイランスキャピタリズム」のもたらした経済的不均衡を打破すべきリーダーへの賛同行為と読み取れる。しかし現実には共和党、民主党ともに「サーベイランスキャピタリズム」生誕貢献及び能動的活用をし政治活動における危惧されるべき民意捏造の普遍性をズボフは説く。この状況は何をもって政治、経済的な真実とするかという民主主義に不可欠な構成基礎要素の信頼性を危ぶむものである。現に二大政党の基、ともに対する政党がフェイクニュースを利用しているとし民意は分断状況が続く。ズボフが警告するのは個性化監視資本主義においてはネット検索による意見構成のプロセスそのものが全て監視されており検問およびプロパガンダの侵入が防げない点である。いわば寡占企業が消費、民意、そして政治をも操作できるというのである。しかしトランプがもたらした歴史的変革はズボフが系統立てたネットワーク型 AI デジタル資本主義の脅威をアカデミックな技術用語を駆使せずとも大衆に体感させその権威に対峙する民意を確立させた点である。これこそまさにかつてカトリックが経験した既存権威衰退の続編ともいえる。

1980 年代から常にセレブとしてメディアに確固たる地位を確立してきたトランプこそマスメディアを余す所無く利用しまたその弊害をも実感し続けた張本人である。その彼が更に上に行く戦略でもって大統領の座を確保したことは精密に計算しつくされた対メディア戦略による必然的な結果と結べよう。グーテンベルグは活字そのものを開放しトランプは活字の伝える情報の検閲に挑戦した。ズボフの説からすれば今やその内容をとらえる思考回路構築の自由がすでに寡占企業により侵され始めているとなる。次なる民の自由保守の戦いはまさにその聖域を獲得すべくものとなろう。この著書は最先端ネット戦略記事を錯覚させる箇所事欠かないがその反面 AI 時代のバリューチェーン運用が引き起こすとする革命的な政治経済変革を体系化し意図せずともトランプ政権誕生への絶大な情報管理変革技術背景を記した解説著であると賞賛できよう。

次にコールターだが日本語訳の本は現在一冊しか発刊されてなく英語圏外では無名である可能性が高いが良きも悪きもアメリカの政治評論界の巨人である。コーネル大学、ミシガンロースクールを卒業し弁護士としてまた司法委員会での職歴がある。当時の大統領クリントンを糾弾した 1998 年著書第一弾「ハイクライムアンドミスデミーナリー」を含め出版した今まで十三冊全てをニューヨークタイムズのベストセラーに名を並べるといふ異例な快挙を成し遂げた超大物御意見番である。その初著を基に様々なメディアにも登場するようになり積極的に行う講演会は常に満席で辛口超速球の硬派な弁論はすぐさまファンを作り上げた。反対派も多く過激派の破壊行為による講演妨害も常となっている。またその最中重装備した警備員に囲まれながらスーパーモデル顔負けの容姿で華麗に会場に登場する姿は風物詩化している。ただ放火、器物破壊が加速し警備上の問題で実際講演が中止となったことも数あり言論の自由がアメリカで蝕まれている現実には危惧すべきであろう。マスコミに対するフェイクニュースへの批判も 2002 年著の二冊目「スランダー」で既に行っている。「アディオスアメリカ」出版を機にテレビへの出演が極端に減るがいまだに 2004 年から始めたコラムを毎週休むことなく自身のホームページで出版しかつ数々のラジオ番組でレギュラーゲストとなっている。執筆及び講演のスタイルは一貫しており膨大な資料および統計を基にした論議でありまた合衆国憲法、法と秩序を重んじている。事細かな説明の合間に神髄を貫くブラックジョークが散りばめられそれは多くにタブー化した社会常識を一喝したヒューモアを通して同意を深めるのに重要な役を務めている。

しかし彼女をアメリカの歴史上後世に名を遺すこととなったであろう著書が「アディオスアメリカ」である。英語ならぬヒスパニックでの題「さらばアメリカ」としたのはメキシコ及び中南米からの違法移民によりアメリカがアメリカでなくなるという意味が込められている。2015 年に大統領選出馬宣言準備の段階においてトランプ選挙対策陣営はその本の出版前

の原稿をコールターに直接要求し彼女は快く承諾しトランプ選挙本部にそれを送った。そしてまもなくトランプタワーにおける大統領選出馬宣言はなんと「アディオスアメリカ」をもとに演説されたと言うべきものとなっていたのである。それは違法移民による凶悪犯罪の問題提起更に政策提示をしたのである。そしてトランプ選挙キャンペーン中核がメキシコ国境壁の建設であるがこれも「アディオスアメリカ」からそのアイデアを引用したまでと断言できよう。

コールターはトランプが大統領選出馬を表明した数日後にテレビトークショーにて大統領選挙の予想を聞かれ確固たる自信の表情をもってしてトランプと宣言した。会場は大爆笑の渦となったのが当時の雰囲気としては当然であった。しかし彼女はアメリカ国民にとって最も重要ともいえる移民対策を取り上げる候補者はほぼ皆無であり壮大な移民対策を掲げたトランプに一気に票が集まると予言したのである。選挙当選はその資金ではなく国民の欲する政策を公約すれさえばいいのであり移民政策は最も欲しがられているにもかかわらずトランプほどに公約として掲げた候補者の欠如を基に彼は当選するというのであった。この「アディオスアメリカ」はトランプ選挙キャンペーンテーマの神髄を提示しヒラリー圧勝とされていた結果を覆す驚愕のマニフェストとなったのである。ちなみにに対する民主党候補者の一人であったバーニーサンダースは実は移民政策においてトランプと酷似した問題提起をしておりトランプ同様熱狂的な支持者を集めていた点は移民政策に対するアメリカ国民の報道されない格別な関心深さを示す。

「アディオスアメリカ」の内容であるがマスコミがいかに違法移民による多岐にわたる凶悪犯罪を隠蔽しているかに膨大な資料を基に丁寧に解説している。詳細に書き上げられた凶悪、残虐犯罪事例は凄まじい描写に事欠かない。無責任な移民法のもと組織的犯罪はテロリストまでも流入している数々の事例も列挙してある。またマスコミの多岐にわたる移民の貢献のみに焦点をあてたキャンペーンの結果更に移民を取り入れるべきという民意をも一部作り出したとする。「アディオスアメリカ」をきっかけにテレビに出演できなくなったのはその本の主張を広めさせないためだと本人は断言している。

歴史的には民主党のテッドケネディが1965年に発案した移民法によりアメリカは変わり始めたとコールターは指摘する。がしかし今や実は共和党も大方同じ政策を進めており国民の移民規制願望をかなえるべく政治家のなさを嘆いている。コールターの描く構図として大企業は低賃金供給先として移民を好み、政治家はそうした大企業と共謀する傍らともすれば国民よりも優遇する政策で違法ながら非国民から得票するとしている。そして今や多様性歓迎の名の基それを推進しなければ人種差別者とする風潮まで作り上げるのに一部成功しているとする。

アメリカでは運転免許は違法移民でも習得可である州が多くそしてそれを基にすべての選挙において投票できるのである。そもそも身分証明書なしでの投票可能な選挙区も多々ある。何百万あるいは何千万ともいわれる不法移民を巻き込みこのようなことが現実にあるのかと疑いざるを得ない。がそこで本の四割ほどにも及ぶ参考資料が読者に問いかけるのである。シリコンバレーで繁栄を続ける一部の企業および政治家の下貧富格差の最も拡大するカリフォルニア州の荒廃を挙げつまりは全体の自殺行為を警告しているのである。また違法移民はその低賃金ゆえ特にアメリカ国民の低所得層から職を奪っているとする。その階層の経済的困窮と違法移民の関連性はまたもや隠される事実であり続ける。そして今それに根本的な対応政策をしないと永遠にアメリカとはおさらばと本のタイトルでくくったわけである。

一見あまりの常識離れした主張に放棄すべき戯言と片付けるべきと結論付けそうになるがそこでトランプ旋風である。マスコミの言うままにすれば違法移民規制を第一の政策としたトランプ候補は真っ先に消え去るべきだったがその正反対、絶大な合法国民の支持を得たのである。これはコールターの主張に対する圧倒的な国民の賛同を証明すると結論できるであろう。これこそ活版印刷により拡散した信仰上の真実が瞬間に絶大な民意として確立された経緯と酷似していると形容できよう。トランプ本人はセレブ時代に愛国心を熱唱することは多々あるも特に移民問題を提示していた例がおおよそ見つからない。しかしトランプ選挙対策陣営は民意救世主たる地位確立をもくろむにあたり「アディオスアメリカ」を基に大統領選挙参入を宣言したのであった。

そして実はどんでん返しでトランプ選挙勝利後に待ち受けていたのである。政権発足後約二年を期にコールターはトランプ再選危機を公言し始めたのである。それは一大公約の移民政策不履行とするのである。そしてバイデン勝利が確実になった後コールターは2016年12月、つまりトランプ勝利の1ヶ月後の友人宛メールを公開したのだがそれはトランプ閣僚人員選考で移民政策を進めるべき役職に間違った人選をしたとし既にトランプ政権の危機感を募っていたのである。民主党大統領選候補予測ではハリスを挙げしかしながらトランプ打倒ならバイデンがもっとも可能性が高いとも公言していた。いち早く笑われながらトランプ勝利を予言した誰よりも早くトランプ政権終了も予言していたのである。更に民主党の勝利にはバイデンまたハリスの名も上げていた先見性には驚くばかりである。

ともすればネット、AI、移民全てを反対しているかと捉えかねない二人の主張だがしかし根本的解決策も明示されている。それは国民のための公開された立法及び法治統制でありこれこそ本来守るべきプラーバシー、文化、国家の尊厳また健全な民主主義持続に不可欠な骨格である。コールターは組織的に隠蔽され続ける民意を開示しズボフはその民意を捏造する新資本主義の現実を解説した。ズボフの謳う思考回路構築の自由は尊重されるべきであるが、今まさにそこが既に戦場と化している。アメリカの歴史は自由を謳歌するもそれは法と秩序の社会契約の下に存在する世界に稀に見る新天地における実験国家枠組みである。その自由を脅かす権威と戦い独立した歴史的背景の下神聖な人格形成過程を寡占企業から守るべく次世代のグーテンベルグ登場すらすでに予想される。反フェイクニュース現象は活字内容の自由を掲げたのみならず既に戦線をそこまで拡大しつつあるかも知れない。支配層による情報独占戦略攻防という構図がトランプ旋風により歴史上恒久的なテーマであることが再び示された。この二冊はトランプ政権誕生への選挙戦略を読む鍵にとどまらない。現在のアメリカ民主主義における不透明な社会力学を開示する必読書といえよう。